よかネット YOKANET

No. 106 2012. 4

（株）よかネット

もくじ

NETWORK

巨大な国際協働プロジェクトを受け入れる国際都市とは
～ CERN（欧州原子核研究機構）、ジュネーブ視察レポート～ …… 2

地方シンクタンク協議会第 10 回経営者会議 グループ討議報告
「地方自治から地域自治へ
～安全・安心な地域のコミュニティづくり」について …… 6

見・聞・食

約 430 年前に伝来した三毛門南瓜（ミケカドカボチャ）の
保存活動から地域の活性化への挑戦 …… 8

アジア最大級の食品と飲料の祭典
Foodex 2012 in japan を体験 …… 11

ゆるキャラグランプリ優勝、くまモンの人気の秘密とは何か？ …… 13

福津の新名物、「ふくつの海スイーツ」販売開始 …… 14

近況

秋月にて、近代俳句の巨人を想う …… 15

久々の腰痛～日々、運動の大切さ痛感 …… 15

表紙解説 …… 16

お知らせ

第 20 回 よかネットパーティーのご案内 …… 17

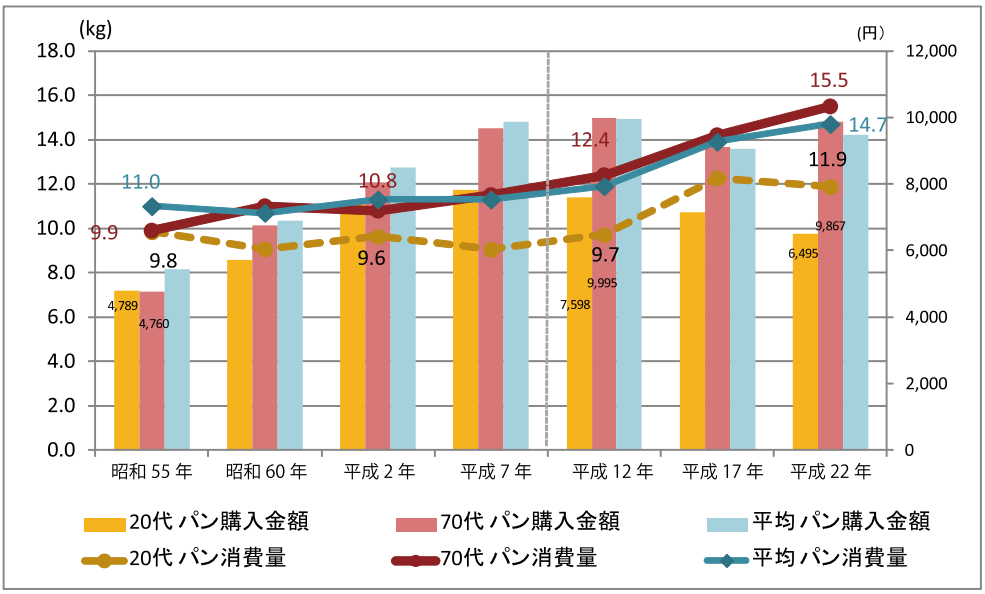
C- 酎自慢大会開催のご案内 …… 18

●パン消費は中高年世代が支えている！？

最近、美味しいと評判のパン屋に行くと、結構、中高年世代が多く来ています。米の消費は各年代ともが量、金額とも減少していますが、パンの消費量は各年代とも増加しています。今回、わかりやすい比較として 20 歳代と 70 歳以上及び各年代の平均値を比較しました。

40 代以上の世代は 20 ～ 30 代に比べて消費量が多く、昭和 55 年からの伸び率をみると、特に 60 代 1. 45 倍、70 代以上 1. 44 倍と 60 代以上の方が伸びています。その消費量は 70 代以上が 15. 5 kg／年間・人であり、20 代より 3 kg近く上回り、また、購入金額も増加傾向にあります。60 代を過ぎた方にパン食の良さを聞いてみると、調理の手間が少なく、洗い物が少ないといった「手軽さ」が挙げられました。（解説～ 16 頁）

20 代・70 代以上の米、パン消費量・消費金額の推移（単位：年間、 1 人当たり）



・二人以上の世帯の世帯年齢別の消費量を世帯人員で除した数値

・平成 55 ～平成 7 年までの 70 歳以上は、データ上は 65 歳以上の消費量、消費額

・消費額は昭和 55 年を 100 としたデフレータを乗じた額

資料：家計調査年報

巨大な国際協働プロジェクトを受け入れる国際都市とは
～CERN（欧州原子核研究機構）、ジュネーブ視察レポート～

原　啓介

●宇宙はどうやって生まれ、何でできていて、これからどうなっていく？

昨年、素粒子物理学の先生からお聞きした話によると、宇宙全体の物質エネルギーのうち、ほとんどが暗黒エネルギーや暗黒物質と言われる測定不能なもので、人類が見知ることが出来る物質は4%ぐらいしかないそうだ。宇宙の始まりやこれから等々、未だ解明されていない謎が膨大に残されており、宇宙ステーションや“はやぶさ”のように惑星探査等で宇宙に「行く」、すばるやハッブルのような望遠鏡で宇宙を「観る」、あるいは加速器により宇宙誕生直後の状態を「創る」といった様々な手法で、宇宙の真理に迫る研究が行われている。

仮想ビッグバンを「創る」次世代の加速器と言われているのが、国際リニアコライダー(International Linear Collider:ILC)である。ILCは、全長30km以上の地下の直線トンネル内に設置した加速器で電子と陽電子をほぼ光速まで加速・正面衝突させ、ビッグバン当初の超高エネルギー状態に近い状態を再現し、衝突によって生成される粒子を測定するものである。質量の起源や暗黒物質の解明など、未解決の宇宙の謎に迫る国際協働プロジェクトであり、現在候補地選定が進められている。

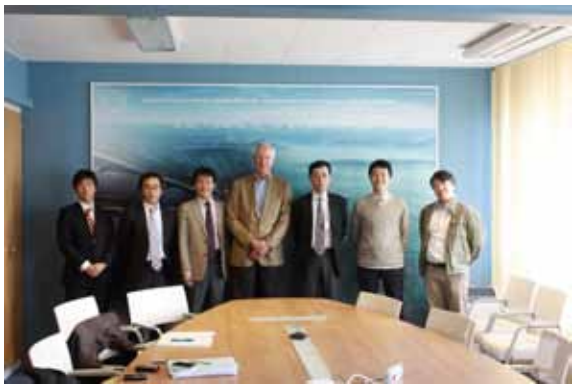
ILCの建設候補地の一つが福岡県・佐賀県境の脊振山地である。弊社はILCを核とした国際研究都市構想の作成を受託しており、私も都市構想研究会の末席に事務局として加えていただいている。

現在、世界の素粒子物理学研究をリードしているのがスイスのジュネーブにある欧州原子核研究機構（Conseil Européen pour la Recherche Nucléaire：CERN）である。昨年、事例調査の一環でCERNを訪問し、ジュネーブ州の行政職員やCERNの職員の方々にインタビューをすることができたので、ジュネーブ等周辺地域とCERNとの関係を中心に報告したい。

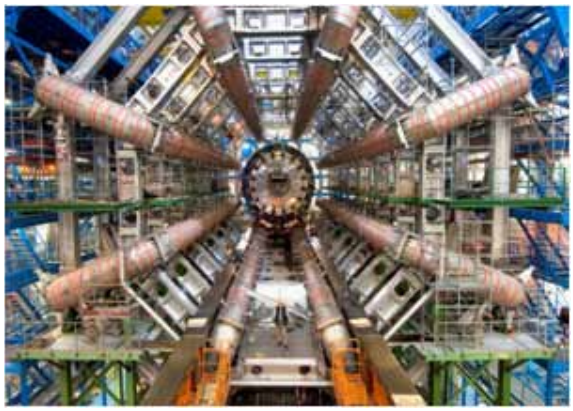
●CERNで行われているのは、超巨大スケールの国際協働プロジェクト

CERNは、ジュネーブ郊外、スイスとフランスの国境地帯に立地しており、1952年に誕生した戦後初の国際協同機関である。約2,500名の職員がおり、世界各国から年間約1万人の研究者・学生がCERNでの研究や実験に参加している。年間の予算規模は約1,000億円であり、その大部分は加盟国による出資によって賄われている。

CERNでは、国際連携、人的資源管理、技術移転、ローカルコミュニケーションなどの分野の担当者からお話を伺った。



CERNのルディガー・ボス氏や現地駐在のKEK(Kou･Enerugi･Kenkyuu･Kikou)の方々、同行した九大川越先生、高田先生、佐大三島先生、九経調上田さん。写真撮影の合言葉は「3､2､1ヒーッグス！」だった。



ATLAS の検出器。真中下に写っている人と検出器全体とを比較すると、その大きさが分かる。
(CERN HP より)

ここ CERN にある加速器 LHC (Large Hadron Collider) が、現時点で世界最大の加速器である。LHC は地下 100m にある周長 27km (山手線は約 21km) のトンネルであり、その中に加速器と、「世界最大の科学装置、史上最大の機械、大聖堂」などと評される ATLAS (高さ 22m、7,000 トン)、CMS (12,500 トン) を含め巨大な検出器が 4 ヵ所設置されている。

また、加速管の中は宇宙の温度よりも低い摂氏マイナス 271.3℃にまで冷却された真空状態であり、数千の超伝導磁石によって光速とほぼ同じ早さにまで加速された陽子が、検出器の内部で毎秒 5,000 万～数億回衝突する。こうして毎秒 6 ギガのペースで積み上がる膨大なデータの中から質量の起源「ヒッグス粒子」の痕跡を探す作業が行われている。

これらの実験により生み出されるデータは世界中の 50 カ国、250 の計算センターにあるスーパーコンピューターをつなぎ、世界最大のグリッドコンピューティングによって解析される。科学雑誌「ネイチャー」は、「大型ヒューマンコライダー (2010.3)」という記事で、「これほど大勢の科学者が集まって研究し、全員が一つの目標に向かって努力をしたことは歴史上一度もなかった」と表現しているが、予算の調達から日常のコミュニケーション、そして研究成果の解析など様々な局面でグローバルな協働が求められる超巨大プロジェクトである。

余談ではあるが、我々が日々使っているインターネットの基盤ワールドワイドウェブ (www) は、世界に散らばる数千の素粒子物理学者のコミュニケーション手段として CERN で開発されたものである。売店では「world wide web は CERN で生まれた」と書かれた T シャツが売られており、私もミーハーなので一枚購入した。

赤い円が空から見た CERN の LHC 加速器のトンネル。実際には地下 100m にあり見えない。(KEK HP より)

●国際的な施設が集積するジュネーブの魅力

(国際都市としての歴史的な蓄積がある)

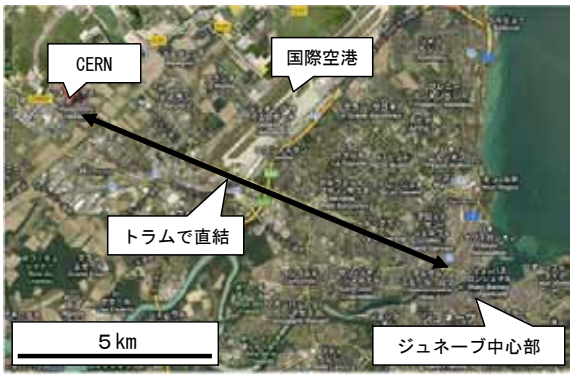
こうした巨大国際研究機関を受け入れている都市が、ジュネーブである。ジュネーブには国際連合欧州本部や世界貿易機関 (WTO) など 31 の国際機関で約 3 万人が勤務し、250 の NGO が存在する。なぜジュネーブにこれだけの多くの国際機関が立地しているのか、ジュネーブ州の国際機関の調整窓口を勤めている担当者によると、「ジュネーブは 1800 年代の赤十字の設立以来 200 年にわたって、国際都市としての土壌が育まれてきた。このことはジュネーブの存在価値であり強み」だそうだ。

現在、ジュネーブは世界有数の国際都市であり、住民の 4 割が外国人と国際色豊かな都市である。一方でレマン湖のほとりに歴史的な町並み、文化財があふれており、飲食店ではチーズフォンデュやスイスワインなどの地域性あふれる食事を楽しむことができる。長い年月をかけて培われた国際性とローカル性が共存した魅力的な都市である。

(各国から訪れる研究者子弟の教育環境が充実している)

またジュネーブは、教育の国際化が進んでいる印象を受けた。公立学校は、小学校低学年は

検出器「ATLAS」のコントロールセンター。常にスタッフが常駐・監視している。



CERNとジュネーブ中心部の位置関係（Google map）

仏語のみ、9歳からドイツ語を学び始め、12歳から英語も学ぶ。ジュネーブはインターナショナルスクール発祥の地だけあって、その教育レベルが高く、選択肢が充実している。インターナショナルスクールの学費は高いところで年間300万円と非常に高額だが、CERN研究者は20～30代の若手が多く、「研究者の生活環境を整える上で、子弟の教育環境整備が重要（CERN担当者）」という理由から、インターナショナルスクールの学費の75%が補助されている。

（都心や交通機関とのアクセスが良好である）

ジュネーブからCERNまでは片側2車線のまっすぐな道路で直結されており、ターミナル駅であるコルナヴァン駅からCERNへは、トラム（路面電車）に揺られて30分ほどで行くことができる。CERNはトラムの終着駅なので、トラム自体や停留所に「CERN行き」と書いてあり、非常にわかりやすい。また、CERNからジュネーブコアントラン国際空港までは直線距離で3kmと近く、世界中から訪れる研究者達が容易にアクセスできる。CERN内の研究者にとっても、生活の利便性が高く、気分転換や異業種の交流が可能な環境となっている。

（地域住民の基礎科学に対する理解が深い）

ジュネーブ州の都市計画担当者に、ジュネーブのまちづくりについてヒアリングをしていたとき、印象的なことがあった。我々がジュネーブに行ったのは、「光よりもニュートリノの方が早い？」というCERNでの実験結果が世界中で報道された2～3日後だったが、その担当者がCERNでの研究内容や報道内容を、まるで我がことのようにスラスラと自慢げに語っており、科学への知識・造詣の深さが伺えた。そこで、「ジュネーブの街の人もそんなに詳しいのか」と聞いてみると、「下に降りて聞いてみたらいいさ。街の人は皆知っているよ」と言うのだ。聞くと、「スイスの国民性は好奇心旺盛で、世の中の動きを常に把握したがるところがあり、CERNでどのような実験が行われているかということについても、住民の大多数はよく把握している」のだそうだ。住民の基礎科学の理解度や関心は日本と比較して格段に高いことを肌で感じた。加えて、村上陽一郎先生の書籍「科学・技術と社会」によると、ヨーロッパにおける「科学」は元々、神の行いを解明する神聖な行為の延長上で、真理の探求に対して国の予算を投入することについても、伝統的に住民の理解が深いのだそうだ。

実際、CERNの研究には莫大な投資がなされているが、国として短期的な利益を求めていなく、長期的な視野で取り組んでいる。このあたりは、科学技術予算が事業仕分けで削られる我が国との違いを痛感させられる。

● CERN、自治体が協働し、住民とのコミュニケーションを図っている

そういった国民性に加え、CERNと自治体側も住民とのコミュニケーションの努力をしている。LHCの稼働前後に、世界各国から研究者が移住し、外国人の人口が増加したことや、「実験によってブラックホールが生まれるのではないか」という噂が周辺地域で広まったことから、CERNはローカルコミュニケーションの部署を新

The Glove 内部。定期的に部屋が暗くなり、壁面一体に宇宙のはじまりや素粒子についての美しく先鋭的な映像が流される。映像のスポンサーは ROLEX。

The Grove の外観。地球を思わせる球形で、環境に配慮した木製の建造物。

CERN で実施される交流プログラム

Draw me a Physicist
- 地元小学生向けに科学者の仕事を教える。20 の小学校から約 400 名が参加。

High School Teachers at CERN
- 高校の物理教師向けの 20 日間の講座を提供。世界各国から約 1,000 名が参加（2010 年）。

CERN Summer Student Program
- 大学生・院生向けプログラム。53 カ国から約 200 名が 2 ヶ月滞在。

設し、様々な交流プログラムを実施している。

自治体側は、CERN のエントランス付近にある「The Glove」という木製の展示館の建設費を拠出し、内部の壁一面を使って再生される壮大なビデオ映像のスポンサーを探すといったサポートを行なっている。展示内容は、CERN の施設紹介や、素粒子、宇宙について、非常に美しく、且つわかりやすく作りこまれており、そのセンスに感心させられた。今後も、エントランス付近の沿道やゲートを CERN と自治体が予算を分担し、整備していくそうだ。

このようにジュネーブは、長い年月をかけて築かれた国際性、基礎科学への理解度の高さといった基盤を形成している。この国際都市に CERN という国際研究機関が立地し、自治体や施設が協働しながら交通・交流機能を整備し、研究者の生活環境を整え、市内の他の関連施設と都市とが上手く連携し、活性化させている。

● ILC をぜひ脊振山地へ！

CERN での研究から生まれた成果は、素粒子物理学分野に加え、www のような通信技術や、重粒子線ガン治療のような医療分野まで幅広い。このように私たちの暮らしを変える様々なイノベーションが ILC を起点に生まれる可能性がある。また、ILC は、施設自体の建設投資だけで約 8,000 億円～1 兆円（費用は関係諸国で分担）であり、これに加えて周辺の研究都市形成やインフラ整備も行われる。また、数千人の研究者が世界各国から集結・定住し、年間数万人の研究者が来訪する。その直接投資だけでも莫大な規模である。

ILC の誘致は、地域の知名度が世界的に広まり、住民や企業の国際性が必然的に高まり、地域のブランドが飛躍的に向上する大きなチャンスである。

現在、国内のライバルは北上山地であり、その他にも世界の 4 ヵ所が立候補している。脊振山地は福岡市、佐賀市といった拠点都市と隣接し、交通や水道、電気、通信面で一定の基盤が築かれている。また、成長するアジア市場に近く、温暖な気候、災害の少なさなどのポテンシャルがある。一方で、ジュネーブと比較して、インターナショナルスクール、語学力、サインなど国際都市としての外国人受け入れ環境や、基礎科学への地元住民の理解などは、ジュネーブに比べ低いため、時間をかけてレベルアップを図っていく必要があるだろう。

日本は素粒子物理学の分野で世界的な競争力があり、日本人が受賞したノーベル物理学賞 7 人のうち、6 人が素粒子物理についての功績で

ある。この分野で世界的に日本への信頼度は高く、研究者コミュニティの中では「CERNの次世代の加速器は日本へ」という機運が少なからず存在するという噂も聞く。こうしたフィールドがもし日本で形成されるならば素晴らしいことだと思う。九州に生まれた私としては、ぜひILCが九州に立地して欲しいと思うし、今後も微力ながらできることはしていきたい。

（はら　けいすけ）

地方シンクタンク協議会　第10回経営者会議　グループ討議報告
「地方自治から地域自治へ～安全・安心な地域のコミュニティづくり」について

山田　龍雄

●地方シンクタンク協議会とは

地方シンクタンク協議会とは、地域に根ざした課題の調査研究や提言活動に携わるシンクタンクが、(公益財団法人）総合研究開発機構（通称：NIRA、元は内閣府の特殊法人）との密接な連携のもと昭和60年に設立された任意団体です。

当社も、設立当初から同団体に加盟し、NIRAの研究助成のもと、いくつかの研究報告をさせていただきました。

現在、地方シンクタンク協議会は全国6つのブロック（東北・関東、北陸、中部、近畿、中国･四国、九州･沖縄)、70機関が加盟し、ブロックごとに研究及び交流活動を行っています。ちなみに九州は､現在､7機関が加盟しております。また、全体ではシンクタンクフォーラム、経営者会議の開催、さらに研究機関誌の発行など、時代のニーズを捉えたテーマによる討議や政策提言などを行ってきました。

当社では、昨年度より「九州・沖縄ブロック」の幹事役を行っている関係で、今回の地方シンクタンク経営者会議の担当幹事役を仰せつかりました。

●温泉地　霧島の地で実施

今回の経営者会議を開催するにあたって、福岡市以外の地で実施したいと思いました。確かに足回りを考えれば、福岡市内が最も適切な場所かもしれません。しかし、地方シンクタンクというからには、九州の拠点である福岡以外の地で行う方が新鮮であり、かつ面白い企画ができるのではないかと思ったからです。また、昨年度から九州・沖縄ブロック幹事のパートナーが宮崎を拠点に活躍されている㈱地域経済研究所になっていただいた時点で、すぐに霧島温泉、霧島酒造視察をイメージし、準備してまいりました。今回の経営者会議が実現できたのも、具体的な運営準備を行っていただいた㈱地域経済研究所及び事務局の皆様のお力によるところが大であります。

●「安全・安心な地域のコミュニティづくり」についてグループ討議

経営者会議では、午前中は各参加機関の自己紹介を兼ねた各地方の話題提供を行い、午後からは2つのテーマによるグループ討議が行われました。第1グループのテーマは「各機関の昨今の経営状況、経営方針について」、 私が進行役を務めた第2グループは、「地方自治から地域自治～安全・安心なコミュニティづくり」というテーマでの話し合いを行いました。

第2グループのテーマは、昨年度の東北大震災の影響及び地域コミュニティが希薄化している現在社会において、暮らしを支える根幹的なインフラである“安全･安心“という面に着目し、再度、地域社会、コミュニティについて多方面からの切り口で議論できればと思い、選択したテーマでした。

当初から相当、視点やエリアなど幅広い意見が出され、整理するのも大変であろうと覚悟はしてましたが、やはりテーマがテーマだけに予想どおりの展開となりました。

主な意見の趣旨としては、次のような意見が出されました。

・安全・安心な地域社会をつくるためには、経済的に自立し安定した社会づくりがベースとなる。
・絆のある地域づくりのためには、行政のエリアだけではなく、広域的なエリアを見据えた安全・安心の地域づくりが必要である。広域的なエリアという中では流域圏域での地域づ

くりを考えることが重要である。

・日常的な安全・安心の暮らしでは医療、福祉、買い物、交通、学びの場が不可欠な要素であり、特に過疎地域、限界集落といわれている地域では、これらの環境をどう確保していくかが課題である。

・国は大都市圏では災害政策を行っているが、国の災害政策が行われていない大都市圏以外の地域では、NPO 法人や公的団体の活動が十分にサービスを受けられない地域を救う鍵となるのではないか。

・地域をみると地域を引っ張っている人のリーダーシップによって成功しているケースが多くみられ、人材を育成していく環境、仕組みづくりが必要である。

●安全・安心をつなぐエリア形成に着目

このような意見をうけて、特に安全・安心をつなぐエリアについて議論を深めました。

（流域圏域について）

・流域圏域を統括するガバナンス（合意形成、意志決定のシステム）は、行政主導のもとに行ってほしい。

・流域連携といった話があるが、関東などは流域が広いため、流域圏域をひとくくりで考えることは難しい。流域圏域を考える場合でも、一定のエリア分けが必要ではないか。九州においても、筑後川流域圏でいろいろな NPO 組織や行政との連携で活動しているが、広く市民に浸透していくには時間がかかる。

（小学校区について）

・小学校区での地域分けができれば一番だと思う。ほぼ全ての地域を網羅できるし、規模も大きすぎない。

・小学校の統廃合が進んでいるが、小学校区は人間関係の柱となっている。もっと重視していくべきである。

・小学校区においては、親子の関係がメインになる。特に、女性の力は大きい。女性が活躍できる場を作ることで、地域が元気になるのではないか。

（過疎地域について）

・限界集落を全て救っていくことは困難である。中心集落を核とし、そこを起点に医療・職・住を充実させていければいい。

・コンパクトシティという考え方は、都市だけのことではなく、過疎地域においても必要である。たとえば、本当に厳しい限界集落の人々が移動して、地域の拠点集落に住めば、行政の負担も少なくなる。

・地域が自然淘汰していく前に、計画的な対応を決断していく必要がある。そのためにも、いかに早く人々を拠点集落に住まわせるような取り組みを行っていくことも重要である。

●安全・安心を支える基礎インフラを考える

さらにエリア論をうけて医療・福祉・買い物・交通・学びの場などの基礎インフラを確保、強化していくための具体的な意見が出ました。

・群馬県上野村では町長の判断で、全村の集落の中心地に医療・介護の中心地をつくり、そこが高齢者の憩いの場を作り出している。

・地域間の関係や高齢化について 20 世紀中に手を打っている地域は、今成功している。今から打てる手を検討し、地道に実現化していく必要がある。

・医療や介護は保険制度があるため、成り立つかもしれない。ICT を活用して過疎の中山間地域を繋なげていくような仕組みを考える必要がある。例えば、独居老人の家に i-Pad を配り、情報を共有することができる。その際には通信会社と連携し、受益者とスポンサーをつくるなど、WIN－WIN（双方にメリットがある）の関係を築いていけるのではないか。

●地方シンクタンクのあり方・役割を考える

安全・安心の地域をつくっていくための地方シンクタンクのあり方・役割について、以下のような意見が出されました。

・地域においては、事業の自立性と継続性が必要であり、この持続性のためには「焦らず、ゆっくり、無理しない」といった自分たちのペースでやっているところが、比較的うまくいっている。

・全国の成功事例を整理し、これらを分析し、紹介していくことが、シンクタンクの役割ではないか。

・6次産業化などにより、シンクタンクも利益を得られるような仕組みはつくれないか。例えば、過疎地域での買い物のあり方などについても研究し、単にボランティアでない、継続できる事業としての仕組みをつくる必要がある。

●自主防災組織づくりをきっかけとした地域コミュニティづくりの再生

具体的な地域自治をつくる手段のひとつとして、「自主防災組織」をきっかけとした地域づくりがポイントになるのではないかとの意見が出されました。地域コミュニティが希薄化していく中で「防災」をキーワードとした地域コミュニティの再生というのは、地域住民にとっても必要性は高いものであり、意見の共有化が図りやすいテーマでもあります。これからの地域づくりを考えるにあたっては、重要なテーマであり、すぐに実行に移していくべきではないかと思います。

今回、「地方自治から地域自治へ～安全・安心のコミュニティづくり」といったテーマで、本当に深い知見、多様な切り口からの意見が出されました。

今回、まとまった整理ができませんでしたが、出された意見の中から、これからの地域づくりに活かせるキーワードを探ることができたという点では有意義な会議ではなかったかと思います。

（やまだ　たつお）

約430年前に伝来した三毛門南瓜（ミケカドカボチャ）の保存活動から地域の活性化への挑戦

山田　龍雄

4月14日（土曜）に「コミュニティ焼酎自慢大会」というイベントを企画しています。（詳細は18頁）

コミュニティ焼酎（略称：C－酎）とは、焼酎メーカーや酒造所が自主製造・販売を目的に造った焼酎ではなく、集落総出で造っている焼酎、障がい者の人々で造っている焼酎、地元企業と農家との協力によって造っている焼酎、地域の特産品を活かした焼酎など、地域の活性化あるいは、地域の豊かさを実現するための資金源確保などのために造っている焼酎をネーミングしたものです。

この企画の実現にあたって、C－酎を造っている団体への参加呼びかけをを行いました。そこで、C－酎に該当する焼酎を探していたとき、豊前市に「三毛門南瓜（みけかどかぼちゃ）保存会」というのがあり、ここで「南瓜焼酎」を造っているという情報を得ました。

早速、豊前市の総合政策課を通じて、「三毛門南瓜保存会」事務局長の猫田信廣さんを紹介していただき、話を伺ってきました。

待ち合わせをした三毛門南瓜保存会の加工所兼食堂は、JR三毛門駅の真ん前にあります。加工所のガラス戸を開けると既に猫田事務局長が待っておられ、丁寧に応対していただきました。三毛門南瓜の歴史、保存活動のいきさつなどについては、猫田さんが平成22年に自主出版された「三毛門南瓜　今昔物語」という本にまとめられています。

以下は、主にこの本の要約となりますが、ヒアリングでの話をまじえながら、報告させていただきます。

●日本最古の南蛮渡来の南瓜

私は10数年前から仕事の関係で、たびたび豊前市には来ていたものの、このような価値ある南瓜があるとは、全く知りませんでした。現在、私達が食している南瓜のほとんどはアンデス山脈を起源とする西洋南瓜だとのことです。

三毛門南瓜の由来については、三毛門村史（昭和29年）に記されています。要約すると『三毛門南瓜は、今から約370年前の天正5年ごろ、印度・カンボチャ圏人が府内（大分市）に来航した。当時、豊前・豊後地方を治めていた大友宗麟に献上されたものなかに南瓜があった。当時、三毛門と府内を行き来し、大友宗麟との主従関係にあった士豪の緒方鎮盛（おがたしげもり）という人が南瓜の種を得て、栽培方法をこの地に広めた。』と記されています。

猫田事務局長によると「三毛門の地は、昔、

猫田事務局長の自主出版の「三毛門南瓜今昔物語」

JR 三毛門駅前の三毛門南瓜のオブジェ
駅前に三毛門南瓜保存会の加工所兼食堂がある

水がなく干ばつの地であったので、緒方鎮盛が見るにみかねて、この地で南瓜栽培をはじめたのでしょう。」とのこと。

三毛門南瓜の歴史は、由来を記した昭和 29 年時点で 370 年ということですから、現在では約 430 年になろうというものです。三毛門南瓜に関する明治中期までの資料は残っていないそうですが、明治 20 年頃には作付け面積約 29 町余（約 29ha）とありますから、三毛門一帯が南瓜畑であったであろうと推測されます。この当時から既に筑豊の炭鉱地方へ販出されており、三毛門南瓜は、当時の炭鉱労働者の貴重な食料源であったようです。その後、全国にも三毛門南瓜は出回り、当時で 40 万貫（1,500 トン）を生産していたと言われていますから、この大正 3 年から昭和初期ごろまでが三毛門南瓜の最盛期であったと思われます。

猫田さんは、「江戸時代の大飢饉に襲われたときも代用食として三毛門の人々を救ってきたのでないかと思われます。また、大友宗麟が直接伝来した臼杵の地では、この南瓜は途絶えてしまったが、大分市内の方で復活の動きがあるそうです。」と言われました。

三毛門南瓜の味の特徴をお聞きすると「西洋南瓜に比べて、水気が多く、すこし口当たりがボサボサしているかなあ」と言われましたが、全く味の予想はつきません。是非、一度、味わってみたいものです。

●昭和天皇への献上南瓜

三毛門南瓜は、昭和 2 年頃から干ばつの窮策として、山本茂氏とその他篤農家の人が蔬菜の採種を始められ、昭和 5 年には福岡県採種連合会が組織され、三毛門村もその連合会に入ったと記されています。この時期に三毛門南瓜は早生･晩生など形や質が改良され、品質も良くなったようです。また、昭和 3 年には、三毛門南瓜が昭和天皇のご即位にあたって、大嘗祭にお供え物する品々の一つとして指名されるという命を賜りました。

この天皇献上の大イベントについては、「三毛門南瓜今昔物語」に栽培地の選択、保管の仕方献上の儀式について、詳しい様子が記されており、当時の天皇献上への熱い思いが伝わってきます。献上する三毛門南瓜は、栽培・収穫した川口家から三毛門村まで筵を敷き詰め、その上を当時の高等小学校 2 年生の女生徒 18 名が羽織袴を着け、白足袋を履き、それぞれ 1 個づつ両手にもって奉送したと記されており、その出発の写真も掲載されています。まさに県・村あげてのイベントであったようです。

この天皇への献上ということが、三毛門南瓜の価値が、再度見直され、今まで種が絶えなかった大きな理由のようです。

●三毛門南瓜保存会の設立

昭和 3 年以降、三毛門南瓜は評判は高くなりましたが、郡是製糸会社が設立され、南瓜栽培から値段のよい養蚕の桑畑に転作する人が増え、徐々に三毛門南瓜の作付けも減少していったとのことです。しかし、戦後の食糧難時代には南瓜団子汁が大いにこの地域の人々の空腹を

満たしたと言われています。猫田さんは「この時期、南瓜のだんご汁を食した世代は、毎日食べていたので、だんご汁を見るのも嫌ですよ」と、笑いながらおっしゃられました。今、ここの加工所では月2回、南瓜だんご汁を中心とした食事会を行っています。機会があれば、是非、食べに寄ってみたいものだと思います。

その後、日本の高度成長とともに食糧事情も好転し、西洋南瓜の普及とともに三毛門南瓜の栽培は減少の一途をたどっていきます。

このような状況下において、猫田さんが三毛門公民館長に就任され、この三毛門公民館で何をするべきかを考えた時に、伝統、由緒ある三毛門南瓜を後世に伝えるため三毛門南瓜に関する資料収集と保存会設立を思い立ち、取り組まれました。平成18年10月に下記の設立趣旨のもと、11名で保存会を立ち上げられています。現在､保存会の会員は約50名となっていますが、主に活動しているのは、役員の14名とのことです。

①今一度、「三毛門南瓜」に光をあてる
②約430数年間、三毛門南瓜を譲り続けた先人や、現在譲り続けている方々に光をあてる。
③「三毛門南瓜の伝統文化」を次世代の方々に伝承する。
④「三毛門南瓜」を通して、公民館や地域の活性化を図る。
⑤三毛門公民館が「三毛門南瓜」の情報源の場となる。

保存会では、右表のように生産部、宣伝・広報部、レシピ部の3部会で活動されています。昭和21年7月には、当時、三毛門小学校に勤務されていた先生3人により「三毛門南瓜音頭」が作られ、踊りの振り付けもつけられ、踊られていましたが、三毛門南瓜の衰退とともに途絶えたそうです。しかし、保存会を設立すると同時に復活させ、三毛門小学校の運動会、三毛門町民の体育祭、盆踊りで披露されています。

また、初代会長の宮崎求馬氏を中心に数名の方々が、保存会設立の10年前ごろから小学校に三毛門南瓜の栽培を指導してきたという歴史があり、今でもこの活動は、脈々と受け継がれています。

■生産部
・小学校での三毛門南瓜づくりの指導を今後も続けていきます。
・南瓜づくり農家を募集し、増やしていきます。
・純正の三毛門南瓜の種や苗を希望者に配布します。
・県農業普及所、及びJAによる指導をお願いします。

■宣伝・広報部
・三毛門南瓜の良さを新聞紙上やホームページ等で全国にアピールします。
・三毛門南瓜に因んだ郷土の特産品を紹介します。
・三毛門南瓜焼酎造りにチャレンジします。
・三毛門南瓜の展示をします。

■レシピ部
・各種催しごとで、三毛門南瓜団子汁をふるまいます。
・要請があれば、出張サービスします。
・三毛門南瓜を使った新しい料理の開発を考えていきます。

三毛門南瓜は、単に南瓜というモノだけが残っているのでははなく、生産の歴史、三毛門南瓜音頭という音楽文化、地場野菜として地域に受け継がれてきたという人々の思いなど、地域の文化や歴史が引き継がれていることに、非常に奥の深いものを感じます。

●南瓜焼酎だけではなく、ペースト、パウダーへのチャレンジ

三毛門南瓜普及のため、最初にワインづくりにチャレンジしたそうですが、どうも消費者には受けなかったようで、その後、一昨年度から焼酎づくりに取り組んでおられます。

南瓜だけでは発酵が弱いらしく、麦（米麹）を加えた焼酎のようです。

原酒に近い39度の焼酎（4合：2,500円）を1,000本､25度の焼酎を2,000本をメーカー（豊前市の後藤酒造合資会社）に委託し、製造していただいたとのことです。39度の焼酎は、伝来の祖である緒方鎮盛の名をとり、「鎮盛（しげ

伝統ある三毛門南瓜とロックにして飲むと美味しい南瓜焼酎

もり)」とネーミングしています。ラベルの筆書き、絵は高校の先生に依頼して作成したそうで、なかなオシャレでプロのデザイナーにも引けを取らない出来ではないかと思います。

猫田さんいわく、「39 度の焼酎はロックにして飲むと、そりゃ美味い。売り切れて、ここにはないが、今度のＣ－酎自慢大会では、4 月に熟成した焼酎がちょうど間に合うので飲んで下さい。」と言われた。ここまで自慢されたら、飲まない訳にはいきません。4 月 14 日が非常に楽しみになってきました。酒販免許は取得していないので、今は酒造メーカーから注文の一括買取という形になっており、手数料を考えると酒販免許を取得し、自前で販売できるようになれば、もっと収益はあがると思われます。

また､三毛門南瓜を使った「ペースト」や「パウダー」づくりにチャレンジされており、パウダー製造では、低温乾燥機と粉末機を購入し、自前で造っておられます。猫田さんは｢パウダーを造るときに低温乾燥機にかけるのだが、低温であるため、南瓜から水が出てくるのですよ。もったいないので、今は、個人的にローションとして顔に付けているが、何か他に使用方法がないものかと思案中です。」と、非常にどん欲に取り組まれています。

現在、三毛門南瓜を生産している農家は 20 ～ 30 件、生産では加工用、家庭用で 2 ～ 3 トンと限られています。

焼酎やパウダーなどの加工品が売れれば、三毛門南瓜の生産増にもつながり、単に伝統野菜としての保存ではなく、産業として成り立ち、保存会の運営も活発化していくという好循環が生まれます。

Ｃ－酎大会では、是非、三毛門南瓜の良さ、伝統を大いに PR していただき、南瓜焼酎を飲んでもらって、地域が豊かになっていくことを期待したいと思います。

（やまだ　たつお）

アジア最大級の食品と飲料の祭典 Foodex 2012 in japan を体験

山田　龍雄

昨年度から、某食品加工のマーケティング・商品企画の相談を受けています。その加工品の販売促進戦略の打合せのときに「来年は、是非 Foodex に出展し、商品 PR をした方がよいのではないか」との話が出されました。

Foodex とは、昭和 51 年から毎年開催しているアジア最大級の食品・飲料の展示会であり、今年で 37 回目を迎えるという伝統あるイベントです。入場者も 3 日間で約 8 万人といわれており、食品バイヤーなどの食品関係者にとっては、新たな商品の発見があり、非常に魅力あるイベントのようです。

今年の Foodex 開催期間（3/6 ～ 3/9 日）に丁度、別件で東京に行く機会があり、早速、事前に入場参加の申込みのメールをすると、招待状が郵送されてきました。

食品関係者でなくても、食品の企画・マーケティングに係わっている趣旨を伝えると入場ができることがわかりました。

当日は、Foodex の会場となっている幕張メッセの最寄り駅、JR 海浜幕張駅で降りると、数百人の人が同時に電車を降り立ちました。会場に着くと、開場時間 10 時前にも係わらず、既に千人近くは来ていたようです。

●今年のキーワードは「女性目線」

今年の Foodex のキーワードは「女性目線」ということで、女性の感覚を意識した企画となっており、カタログをみると①女性のおやつ実態、②女性が食べたい肉料理、③日本酒と料理が働く女性を魅了する、④女性と食の健康

玄関口受付のコンセルジュの女性たち

ニーズ、⑤女性の買い物行動など、女性をターゲットとしたトークショーやセミナーが企画されていました。また、「Foodex 美食女子トークラボ」という特設ステージでは、海外商品を取り上げ、生モニタリングという企画も立てられていました。これからも食に関して、厳しい目と舌をもっている女性の評価は非常に大切なことであり、「女性目線」というテーマは、永遠かつ不可欠なテーマであろうと思います。

●会場の広さに驚愕

会場へはカメラは持ち込めず、あいにく会場内部の様子を写真撮影ができなかったため、本誌に掲載できないのが残念です。

会場に入って先ず驚くのは、その会場の広さです。福岡最大のイベント会場であるマリンメッセの約 4 ～ 5 倍はあろうかと思われる空間に展示ブース約 3,300 がところ狭しと並んでいます。出展企業・団体が約 2,400、出展参加国 73 カ国というから、これを一つひとつ丁寧に見ると到底一日では見学できません。そこで、1 時間ぐらいはさっと歩き回り、興味のありそうな商品を見てみることにしました。

海外の出展では、イタリア、スペイン、中国が他の国に比べて大きなエリアを占めていました。特にイタリア、スペインをはじめ、ワインを生産している国々ではワイン出展が目立っていました。これもワイン需要が伸びている我が国において、さらに円高による輸出のしやすさを反映しているためではないかと思いました。

● Foodex に行くときは朝食は控えめにすべき

興味あるブースを覗くと、ほとんどのところが試食品を勧めてくれます。勧めてくれる試食品は量は少ないのですが、1 ～ 2 時間ほど回るとお腹が一杯になってきます。このときにホテルでの朝食を食べてきたことを、少々後悔しました。また、出展商品では肉、魚、スープ、サラダ、ドリンク、デザートと全ての食材、調理品が揃っており、上手に回るとこれらの食材をバランス良く食することができそうです。

来年、Foodex に初めて参加される方々は「朝食控えめ」をお勧めします。

●気になる品、お取り寄せしたい品々も数多くあり

これだけの商品が出展されている中では、到底すべて味合うことはできません。4 時間ぐらいゆっくり回っても 20 ～ 30 品程度ではないでしょうか。私が試食した中で、下記の商品は、今後の展開が気になるものであり、機会があればお取り寄せしたい商品と思いました。

①高知県四万十町　㈱四万十ドラマ
「紅茶ジャム」「しまんと紅茶」・・・・・・・ この商品のパッケージには「柚子ドリンク～ごっくん馬路村」をデザインした梅原真氏が係わっておられ、パッケージデザインもインパクトがあります。

②福島県伊達市　あぶくま食品㈱
「若桃の甘露煮」・・・・・・・ もともと桃の産地である伊達市では、桃の栽培過程で小さい桃は摘み取ってしまいます。この甘露煮は、若い桃を活用した商品です。歯ごたえもよく、いろんな料理にもアレンジできそうで面白い商品です。

③島根県出雲市　㈱河村食品
「大和しじみのみそ汁」・・・・・・・ インスタントの商品ですが、コンビニなどで販売しているものに比べて、しじみの香と味が芳醇であり、お酒を飲み過ぎたときに味わいたい一品です。

④岐阜県八百津町　内堀醸造㈱
「デザートビネガー」・・・・・・・ お酢の醸造専門の会社であり、商品多角化の一環としてフルーツを活用したビネガーを 30 種類ほど造っています。ブルーベリーのビネガーを牛乳で 4 倍に薄めたものを飲ませていただきましたが、これがビネガーの影響でヨーグルトみたいな食感となり、なかなか美味でした。他のフルーツビネガー

もワインなどと調合されており、飲みやすいビネガーでした。

⑤カリフォルニア産　ラングース農場

「あきたこまち有機栽培米」・・・・・20 数年前、アメリカに行ったとき食べた「ごはん」はパサパサしており、到底、日本産米の敵ではないなあと思っていましたが、今回、このカリフォルニア米は、少し固めではありましたが、なかなか美味しいものでした。値段は 5 kg 単品で 3,130 円と結構高めに設定されていますが、量が増えればもっと安価になっていくだろうと思われます。

今回は、最初の視察ということで、分野にとらわれず、見て回りましたが、再度、見学あるいは出展の機会ありましたら、もう少し的をしぼって回りたいものだと思いました。

会場を回ってみて、商品自体の魅力は第 1 でですが、ブースのデザインや展示レイアウト、商品の飾り付けなどに少しオシャレ感がないと入ってみようという気にならないと感じました。出展するにあたっては、この辺のデザインは工夫する必要があろうかと思います。

約 4 時間、会場をうろうろし、くたくたになって会場をあとにし、家路へと急ぎました。

（やまだ　たつお）

ゆるキャラグランプリ優勝、くまモンの人気の秘密とは何か？

寺山　香

●熊本駅にあふれているくまモン

熊本駅を降りると、女性たちがやけに集まっているコーナーがあります。彼女たちのお目当ては何かというと、熊本県の「ゆるキャラ」、くまモンです。くまモンは『ゆるキャラ（R）グランプリ 2011』で優勝してからというもの、その人気が高まっています。

「ゆるキャラ」とは、「ゆるーいキャラクター」のことです。主に地方自治体やまちおこしなどのイベントに参加しているキャラクターで、①郷土愛に満ち溢れた強いメッセージ性があること、②立ち居振る舞いが不安定かつユニークであること、③愛すべきゆるさを持ち合わせていることなどが、「ゆるキャラ」の提唱者によって位置づけられています。

熊本で手に入れたくまモングッズ。
中央下の名刺は県職員の方から頂いたもので、くまモンのお腹に名前が載っています。

熊本駅内ではお土産屋さんにくまモンのグッズが並び、中にはあのキティちゃんとコラボレーションしているものなどもあり、その人気が全国区に広がりつつあるのです。

●くまモンがここまで広まったのには著作権の問題が大きい

くまモンがここまで広まった背景としては、著作権の問題が大きく係わっています。くまモンの著作権は県が買い上げているため、県に申請をとり、許可がおりさえすれば、くまモンのキャラクターを使用することができます。そのため、現在、県が許可したくまモン商品の販売業者は 782 社、商品は、衣類・食品など 2,076 種類にのぼっており、商品化の要請はひと月に 200 ～ 300 件にのぼるそうです。これらの効果もあり、2011 年のくまモンを使った商品の売り上げは、総額 25 億円を超えたとのことです。「ゆるキャラ」だからといって、その経済効果は馬鹿にできません。

「ゆるキャラ」は、主に地方自治体のキャラクターが多いため、著作権に関してはかなり厳しく設定しているキャラクターが多いのですが、くまモンのキャラクターは実質著作権がフリーであることが様々な商品開発につながり、認知度を上げることに成功したとの事です。

また、熊本県庁でも、昨年はくまモン好きの職員が集まって自前でくまモンの形をかたどっ

た名刺をつくっているなど、各課が一丸となってくまモンを応援しているようです。このブームにのって、くまモンが全国の方に熊本をはじめ、九州をPRしていってくれることが楽しみでもあります。

ちなみにこのくまモン、単なるキャラクターではなく県の職員であり、きちんと自分の名刺をもっているそうです（名刺に書いてあるキャッチコピーもくすりと笑えるものが多いです)。このような設定も、ゆるキャラをより魅力的なものとする一因となっているのでしょう。現在、本物のくまモンは人気のため、様々なところを飛び回っているようです。なかなか会えないとは思いますが、一度実際に見てみたいですね。

（てらやま　かおり）

福津の新名物、「ふくつの海スイーツ」販売開始

山辺　眞一

福津市の観光プラン策定後の取り組みの第一弾であった昨年度の「ふくつの鯛茶づけ」に引き続き、今回は新たなお土産開発の取り組みが行われた。福津のイメージで、いつも一番にあがる海をテーマに、「ふくつの海スイーツ」の販売が始まった。この企画は福津の目玉となる土産品の開発・改良を目的としたもので、福津の海をイメージしたオリジナルのお菓子を、市内の12店舗がオリジナルのお菓子として販売している。

海をイメージして、どういうお菓子が開発されたのか。各店舗で開発されたお菓子を集めたのが次の写真である。砂浜や真珠をイメージしたものや亀や鯛を形取ったもの、福津のトマトやナスを使ったものなど、それぞれのお店によって工夫が凝らされている。見て楽しい・食べて楽しいスイーツというイメージである。

3月最後の会議に行った際に、購入し試食をしてみた。今回入手できたのは「海真珠～ふくつの宝石～」と「TortaSabbiosa(トルタサビオーザ)～砂のケーキ～」の2つである。「海真珠～ふくつの宝石～」は真珠をイメージし、福津の老舗である豊村酒蔵のお酒を使って仕上げたクッキーで、さくさく、ほろほろとした食感がクッキーの美味しさを引き立てている。「TortaSabbiosa(トルタサビオーザ)～砂のケーキ～」はベネチア地方の伝統的なケーキであるTortaSabbiosa(トルタサビオーザ)にチーズのクリームをのせて食べる。プチプチとした不思議な食感が砂のイメージにぴったり。販売開始から地元の評判は上々のようで、子どもや主婦を中心に人気が出そうだとのこと。「ふくつの海スイーツ」は全部で14種類あり、一回で全てのお菓子を制覇するという人はなかなかいないはずだ。全部を食べるためには全ての店舗を回らなければならない、福津を訪れるお客さんがいろんなスイーツを味わうために何回も来てもらうことを期待している。

もちろん、今年も「ふくつの鯛茶づけ」フェアが5/12から開催されることになっている。春になったら「ふくつの海のスイーツ」と「ふくつの鯛茶づけ」を是非楽しんで欲しい。

（やまべ　しんいち）

「ふくつの海スイーツ」全14種類は、どれもユニークで工夫が凝らされています。

近　　況

秋月にて、近代俳句の巨人を想う

3 月 20 日、秋月で行われた廣久葛本舗の葛蔵開き（3/17 ～ 20）に行ってきました。この葛開きでは、単に今年収穫された葛根のお披露目だけではなく、葛の食文化や秋月の歴史を楽しんでもらうセミナーも同時に企画されていました。今回私が参加した講演会では、「歴史の中の秋月」のテーマで、「近代俳句の巨人」といわれる高浜虚子が秋月を訪れた際の話などを実際にお聞きしました。講師の方は高浜虚子の秋月訪問を実際に案内された方で、自身も俳人として当時の「ホトトギス」などの同人誌に投稿もされています。

高浜虚子は昭和 21 年に、実父である池内庄四郎政忠の剣術修行の足跡を辿るために秋月を訪れています。父の辿った足跡を辿りながら、当時残っていた宿泊地や剣術師範宅跡を見て涙したそうです。その時に残した句が、

「濃紅葉に涙せきくる如何にせん」

です。この句を「濃紅葉や～」とせず「濃紅葉に～」とした感性こそが、虚子が近代俳句の巨人といわれるゆえんである、とおっしゃられていました。つまり「濃紅葉や」としてしまうと、ここで完結した印象を与えてしまい、次の句へのつながりが薄れてしまう、ということでした。俳句をほとんど嗜まない者からするとなかなか理解が難しく、一言で句の作られた背景や作った人の心情まで表現する、故に一文字が違うだけでも聞いた人に様々な印象を持たせる、といった俳句の奥深さを垣間見ることができました。

講師の方は 30 代のころ、当時 80 代で秋月に来た高浜虚子をご案内したされたそうです。

葛の葉のお茶や葛湯、葛のおやつを楽しみながらの講演でした。

当時の「ホトトギス」は「1 年に 1 回掲載されれば立派なもの、大抵 3 年に 1 回掲載されるかどうか」というほど、投稿者も多く、俳句人口が今とは比べものにならないほど多かったそうです。現在、俳句人口は減少していることは事実ですが、一方では、現在でも携帯電話のメールなどで俳句や短歌などを紡ぐという新しい文化も生まれています。

暖かくなり、様々な場所に遊びに行きたくなる季節がやってきました。ついでに土地の文化に触れ、当時に思いを馳せるのも素敵だなと、まだうっすらと肌寒いなか、春が楽しみになりました。

（寺山　香）

久々の腰痛～日々、運動の大切さ痛感

3 月初旬の早朝、少し腰の違和感を覚えながらも出社し、午前中、パソコンに向かって明日締切の資料整理をしていた。昼前に急に立ち上がったのが引き金になったのか、腰の右側に激痛が走った。これからがいけない。少し腰を伸ばす動きをすると激痛が走り、普通に歩くこともできず、杖をついての小幅歩行となってしまった。

数年前に腰痛に苦しめられてから、就寝前には腰を伸ばす運動をしていたのであるが、忙しさにかまけて怠っていたのが悪かったのか、久々に腰痛に苦しんだ。

直ぐに近くの整骨院にいくと「軽いぎっくり腰ですね。元々背骨が右側に湾曲しているので、右側の筋肉に負担をかけているようです。」とのこと。確かに腰痛のときは、いつも決まって右側の方の痛みが激しいようであるから、背骨の変形が大きな原因かもしれない。

数日ほど近くの整骨院に通い、比較的安静にしていたら痛みもやわらぎ、今ではなんとか日常生活には支障がないぐらい回復した。

この時期、数日間で回復したから良かったものの、本格的なギックリ腰であったなら、仕事にも支障をきたし、多くの人に迷惑をかけていたかと思うと、冷や汗ものであった。

これからは腰の回りの筋肉が硬直しないよう、日々、怠けずに運動を続けなくてはいけないと思った次第である。　　（山田　龍雄）

表紙解説

私の家の近所に、新しいパン屋さんができたのですが、最近になって、土日は朝から行列になるほど人気が出てきました。お客さんは主にファミリー層が車で来ていることが多いようですが、よく見ると、50 ～ 60 代位のお客さんも多い事に気がつきました。そういえば以前私の母も、「朝はパンがいい」と言っていましたし、祖母も朝はパン食が多い、と聞いた事がありました。ひょっとしたら今、上の世代の方がパンをかなり食べているのではないかと疑問に思ったため、パンを食べているのはどの世代の方が多いのか、ということを調べてみることにしました。

（若い世代の購入金額は米がパンを逆転している）

「若者がよくパンを食べているのではないか」とは言われていますが、家計調査年報を見てみると、一人当たりの年間消費量は、平均で見ると米は減少傾向、パンは増加傾向にあります。購入金額を見てみると、若い世代は平成 12 年に 20 代と 30 代がパンの購入金額が米の購入金額を上回っており、平成 22 年には 20 代～ 50 代までパンが米を上回っています。

具体的な世代を絞ってみてみると、「30 年前 20 代→現在 50 代の世代」は家族を持ち、一番食品の消費が増える 30 代～ 40 代の頃に米の消費量が大きく下がっています。一方でパンは 50 代になっても消費がだんだん増加しています。また、30 年前 40 代→現在 70 代の世代も、消費が減っていくと予想される中、未だにパン消費は増え続けているという現状があることから、特に中高年世代が多くパンを食べているという傾向がみられます。

（若者は何を食べているのか？）

一方で、若い世代の人達は、30 年前に比べて、米やパンを食べる量が圧倒的に減っています。また、購入金額だけで見ると、中高年世代の方がパン・米だけに留まらず、その他主食的調理食品（弁当・惣菜等）を多く消費しており、中高年世代の消費が量・金額ともに牽引している

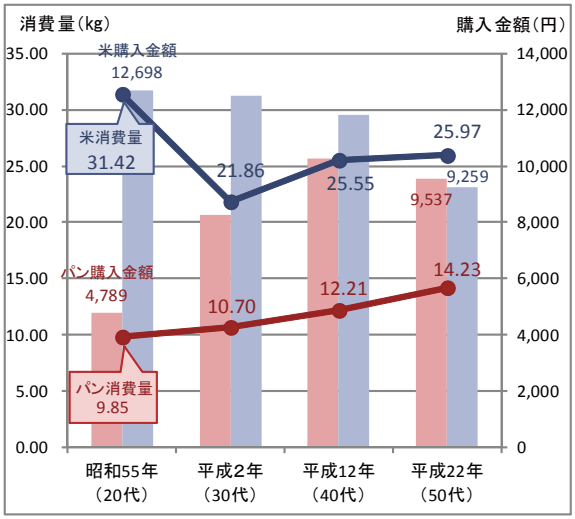
年代別の米・パン消費量と購入金額（昭和 55 年～平成 22 年）　　（単位:1 人あたり／年間）

米	消費量(kg)							購入金額(円)						
	平均消費量	20代消費量	30代消費量	40代消費量	50代消費量	60代消費量	70代消費量	平均購入金額	20代購入金額	30代購入金額	40代購入金額	50代購入金額	60代購入金額	70代購入金額
昭和55年	45.01	31.42	35.28	50.88	52.03	53.95	52.16	17,912	12,698	13,963	20,077	20,945	21,754	21,238
昭和60年	41.65	24.34	29.87	45.43	49.37	50.05	49.96	21,613	12,644	15,369	23,316	25,874	26,378	26,591
平成2年	34.73	19.65	21.86	34.81	41.89	45.02	43.25	19,980	11,140	12,511	19,913	24,217	26,175	25,359
平成7年	30.57	17.23	18.05	27.85	37.12	39.32	40.53	18,333	9,986	10,572	16,370	22,438	24,015	25,092
平成12年	30.99	15.95	18.48	25.55	34.83	43.84	41.32	14,763	7,240	8,352	11,821	16,648	21,237	20,876
平成17年	28.23	13.26	15.97	21.79	27.91	40.34	39.91	11,363	5,339	6,155	8,553	11,332	16,292	16,522
平成22年	26.86	12.19	14.61	22.00	25.97	34.71	38.78	9,620	4,254	5,068	7,719	9,259	12,689	13,995

パン	消費量(kg)							購入金額(円)						
	平均消費量	20代消費量	30代消費量	40代消費量	50代消費量	60代消費量	70代消費量	平均購入金額	20代購入金額	30代購入金額	40代購入金額	50代購入金額	60代購入金額	70代購入金額
昭和55年	11.04	9.85	10.91	11.99	10.47	10.24	9.89	5,442	4,789	5,332	5,945	5,218	4,934	4,760
昭和60年	10.66	9.07	9.52	11.25	12.34	10.67	10.97	6,885	5,727	6,746	7,372	6,582	6,467	6,751
平成2年	11.00	9.79	10.70	11.76	10.53	10.37	10.78	8,504	7,484	8,276	9,080	8,301	8,029	8,043
平成7年	11.34	9.06	10.72	12.07	10.94	11.29	11.47	9,862	7,830	9,194	10,536	9,720	9,830	9,662
平成12年	11.88	9.71	11.42	12.21	11.83	12.13	12.37	9,939	7,598	9,198	10,275	10,168	10,227	9,995
平成17年	13.92	12.28	12.94	14.18	13.74	14.58	14.16	9,068	7,161	8,251	9,334	9,372	9,219	9,099
平成22年	14.70	10.97	13.07	14.76	14.23	16.14	15.55	9,474	6,495	7,980	9,564	9,537	10,475	9,867

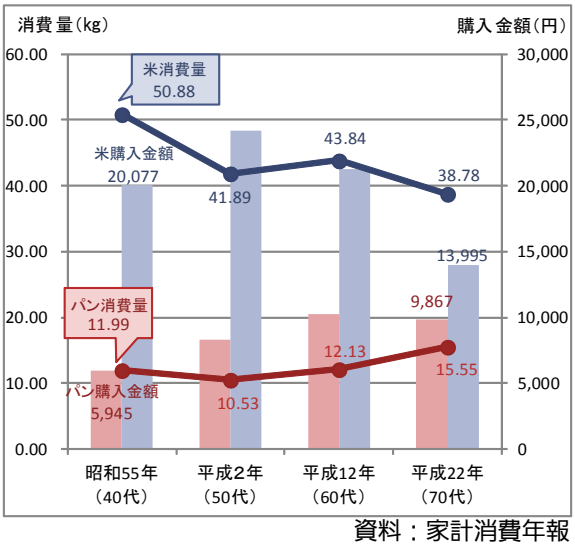
資料：家計消費年報

S 55 年 20 代→ H22 年 50 代の世代



資料：家計消費年報

S 55 年 40 代→ H22 年 70 代の世代



資料：家計消費年報

ことがわかりました。　今回の調査で、若い人は食べるものが多角化している点に加え、食品の消費自体が減少しているではないのではないかと考えられます。

今回の調査で、ご飯に限らず、パンや外食、その他主食的調理用品に関しても若者の消費が減っており、理由として安価な外食が増えたことや食生活が多様化していることが挙げられるようです。一方で、中高年世帯は消費量も多いのですが、金額も高く現在の食品消費を担っているようです。しかし、やはり気になるのが、米の消費量が大きく減っていることです。最近はご飯で作ったパンなどもあるようですので、

米・パン合計　消費量　　単位：kg

	平均	20代	30代	40代	50代	60代	70代
昭和55年	56.05	41.26	46.19	62.86	62.50	64.20	62.06
平成22年	41.57	23.16	27.69	36.76	40.20	50.86	54.32

資料：家計消費年報

多様化するニーズに対応するために、食べ方の工夫をしていくことが必要なのかもしれません。

余談ですが、この調査をしている間、どうしてもパンが食べたくなったため、昼食はほとんどパンでした。最近は天神方面にも新しいパン屋さんが何件かオープンしていたため、早速行ってみたのですが、中高年の奥さま方が多く、調査の実状を実感することとなりました。

（寺山・山田）

第 20 回　よかネットパーティーのご案内

今回のよかネットパーティーは、第 20 回の節目の年ということで、節目となるパーティーを企画中です。好評だった去年に引き続き、今回も日頃お世話になった方々にお返しする意味で、これまで所員が各地域を回って美味い、応援したい食べ物・飲み物を私たちが準備いたします。(是非紹介したいというものがあれば、お持ち下さい)。
皆様のご参加をお待ちしております。

日時：平成 23 年 5 月 19 日（土）13:00 ～ 15:30
場所：警固神社境内　神徳殿
会費：1, 000 円
（お皿をお持ち帰りご希望の方は
別途 1, 000 円お願いします）

～寄って・酔って・あなたも地域も幸せに～
Ｃ－酎　自慢大会　開催のご案内

◆Ｃ－酎って？

・集落総手で造っている焼酎　　・障がい者の人々でつくった焼酎
・地元企業と農家とのコラボ焼酎　　・都市と農家とのコラボの焼酎
・地域特産品を活かした焼酎

などなど、仲間どうしでつくるコミュニティ焼酎のことです。

今回、これらのＣ－酎づくり同士の交流、情報交換、販売促進を目的にＣ－酎自慢大会を開催していと思います。このイベントはＣ－酎づくりに関わっている団体関係者はじめ、このような地域活動にご関心があり、こよなく焼酎を愛する人のご参加を希望しています。

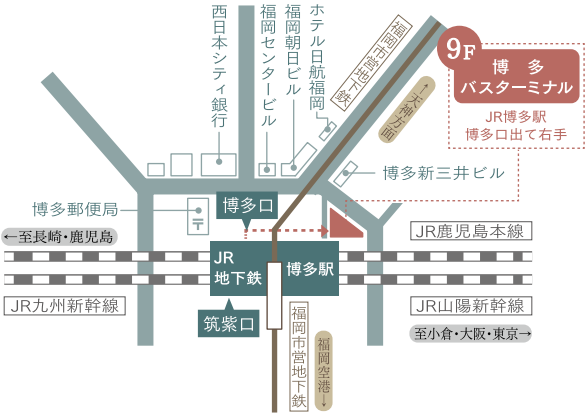
◆日　時：2012 年４月 14 日（土）　受付　17:00　開催 17:30 ～ 20:00

◆場　所：博多バスターミナル９階（大ホール）

◆参加料：2,500 円（１人）

◆当日のスケジュール

１．開会あいさつ
２．参加団体による焼酎自慢
３．試飲＆懇親会
　※懇親会の時間内で各自投票
４．Ｃ-酎グランプリ、その他賞の発表
５．閉会



◆参加申込み：参加希望の方は事務局に電話してください。申込み用紙を FAX またはメールにて送らせていただきます。

◆主　催：コミュニティ焼酎大会実行委員会
事務局：㈱よかネット TEL　092-283-2121
山田・寺山［㈱よかネット］、上田［(福) さつき会玄海はまゆう学園］、
齋藤［NPO グラウンドワーク福岡］、堀口［ランドブレイン㈱］、雪丸［㈱遊喜］

編集後記

よかネット 忙しかった年度末も終わり、もうすぐ春が来ます。今年は寒かったせいか梅の開花が遅いようですが、もうすぐ開花の兆しもみえているようです。暖かくなり、イベントも多くなると思うと外に出るのがますます楽しみになってきますね。よかネットでも、上記した「Ｃ－酎大会」、「第 20 回よかネットパーティー」と企画を考えていますので、お時間がありましたら是非ご参加ください。（て）

よかネット 3 月は業務の締切も重なることから、原稿執筆も厳しく、いつもより薄めのよかネットとなってしまいました。送付も少し遅れましたが、今後とも、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いします。（だ）

よかネット　No. 106　2012. 4
（編集・発行）
㈱よかネット
〒 810-0802 福岡市博多区中洲中島町３番８号
福岡パールビル８階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
東京事務所　TEL 03-3288-0240
名古屋事務所　TEL 052-202-1411
㈱地域計画・名古屋